

良寛歌集

吉野秀雄 校註

よし の ひで お
吉野秀雄

1902年群馬県生。慶応義塾大学経済学部中退。歌人。会津八一門下。1967年没。

主著 『吉野秀雄歌集』『苔径集』『早梅集』『寒蟬集』『短歌とは何か』『良寛 歌と生涯』ほか。

良寛歌集

東洋文庫 556

1992年10月9日 初版第1刷発行

校註者 吉野秀雄

発行者 下中弘

印刷 株式会社 共立社印刷所
製本 株式会社 石津製本所

電話編集 03-3265-0461 〒102 東京都千代田区三番町5
発行所 営業 03-3265-0455
振替東京 8-29639 株式会社 平凡社

© 株式会社 平凡社 1992 乱丁・落丁本は直接読者サービス係
Printed in Japan でお取替え致します(送料小社負担)

ISBN4-582-80556-6

東洋文庫 556

良寛歌集

平凡社

吉野秀雄 校註

装
幀
原

弘

目 次

解説

良寛調について	九
良寛の歌の発足・個性・推敲について	二
発足	二
個性	三
推敲	三
良寛と万葉集との関係について	二七
本集の成立ちについて	四〇
諸本の校合	四〇
古歌との対比	四三
配列の順序	四三
語句歌意の解釈	四四
内容の多化と純化	四四
余言	四七
参考文献	四七

凡 例	……………	五
本 文	……………	五
短 歌	……………	五
春	……………	五
夏	……………	六
秋	……………	九
冬	……………	一四
雑	……………	一四
旋頭歌	……………	一三
雑体歌	……………	一六
長 歌	……………	二四〇
解 題	『良寛歌集』が「東洋文庫」の一冊として復刊されるに当たって	二九七
索引	……………	三五
	吉野壮児……………	二九七

本書は、吉野秀雄校註『良寛歌集』の復刊である。
『日本古典全書』の一冊として、朝日新聞社より昭和
二十七年（一九五二）六月三十日に発行された初版に
よる。

良^り寛^{かん}歌^か集^{しゅう}

吉野^{よしの}秀雄^{ひでお}
校註

解 説

良寛調について

どんな議論をもさし措いて、いきなり良寛の歌境の唯中に入つてみることにしよう。それも理念を有たず、思ひ出すままに歌を抜き出すといふやうにしたい。

*

*

雪の夜にねざめて聞けば雁がねも天つみ空をなづみつつゆく

類歌に「ひさかたの雲居をわたる雁が音も羽白妙に雪や降るらむ」があり、その方には「きさらぎの末つ方なほ雪の降りければ」といふ詞書がついてゐる。一首至極平淡で、しかも下の句は人の世の無量の寂寞感をひびかせてゐる。雪空をゆきなづむ雁と作者との間にはすでに一毫のけぢめもなく、よろこびをものなしみをも自然と共にした良寛の、ここでは悲痛の呼吸が感じられる。それは真向より強烈に襲ひ来るものとは異り、しみじみと浸透しついつしらず胸中の奥処に達してゐることに気づくといふ具合のものである。

「ひさかたの」の方には、古歌の「梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の羽白妙に沫雪ぞ降る」の影響が明らかであるが、この歌が万葉集所出であつて且つ新古今集にも同じ形で出てゐることが注意される。

ちんばそに酒に山葵^{わさび}にたまはるは春はさびしくあらせじとなり

詞友の阿部定珍から、ちんばそ——神馬藻を音読した訛りで、海藻のほんだはら——や酒や山葵を贈られて詠んだもの。「ちんばそに」の方言使用も素朴だし、「酒に山葵に」と重ねてもうるさからぬし、殊に第四五句の使役法によるいひまはしが非凡で、それは定珍に対する親愛と感謝の念の遺憾なき現はれであると共に、作者の心底夙に春のさびしさ——秋のさびしさならぬ一種甘美なやるせない春のさびしさ——を湛へてゐたことをおのづから告げてゐる。

一首、構へやはからひがない。あるがままの自然の流露であり、しかも作歌技術として下の句の抑ふべきところはきちんと抑へてゐる。

草の庵に足さしのべて小山田の山田のかはづ聞くがたのしさ

初二句は良寛の詩句「夜雨草庵ノ裡、双脚等閑ニ伸バス。」に相応するが、この「足さしのべて」は例へば托鉢の疲れを医してゐるといふやうな實際の状態であつて、まことに空疎でない。「小山田の山田の」と準枕詞を使つて調子を取りながら、決して浮薄でない。「聞くがたのしさ」も、熟しきつて流れようとするところを危くひきとどめたるまみを保つてゐる。

この歌、弟の由之におくつた別伝には、「草の庵に足さしのべて小山田のかはづの声を聞かくしよしも」とある。「聞かくしよしも」は万葉集に「君が御言みことを聞かくしよしも」「清き瀬との音を聞かくしよしも」などの例があり、聞くことが快いの意。

この里に手まりつきつつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし

手毬・はじき・草相撲・隠れん坊などをして稚童らと相嬉戯することは、良寛の生の充足の重要な場面であつた。従つて類想の歌はかなり多い。

一首、ほのぼのとして温く、ふんはりとふくよかに人を包み来る感触を受けるが、是即ち良寛の人間的愛念を基盤とした諷詠なるがために外ならない。ここに至つては「暮れずともよし」の先例を古歌に求めることなどはもはや無用で、ただ渾然としていかにも良寛の作、良寛以外の誰びのものでもないといひきることができる。

飯乞ふと我が来しかども春の野に董つみつつ時を経にけり

托鉢は良寛の生活である。玉の緒をつなぐ唯一の手段である。しかしながら、野べの董の愛らしさに心惹かれて行乞を怠り、時を忘れることもまた彼の生命のやみがたい欲求であつた。

一首、街氣も誇耀もない。淡如としていふべきをいひ了せてゐる。

むらぎもの心樂しも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば

「むらぎもの」は枕詞。この歌、單純であつて空虚でない。内に満ち溢れるものをひとたび圧縮した末の單純であるから、却て背景のひろがりを感じさせる。これは類歌の「むらぎもの心は和ぎぬ永き日にこれのみ園の林をみれば」などと共に良寛調の特色をはば代表する作といへるが、歌は事柄を叙述するものでなく心情を高らかに調べるものであることを知る者にとつては、同時にこの單純さが容易ならぬ單純さであり、これ以上を抒べる必要はなく、否これ以上を抒べてはならぬ道理をも會得するに難くあるまい。

相連れて旅かしつらむ時鳥合歡の散るまで声のせざるは

詞書に「五月過ぐるまで時鳥の鳴かざりければ」とある。初二句の擬人法は普通厭味なものだが、この際不思議に氣にならず、しぜんに誘ひ込まれてしまふ。それといふのも、「合歡の散るまで」の清新さ、みづみづしさに蔽はれてゐるためであらうか。この句は空想では産めない。合歡の散るのを目撃しての把

握である。「声のせざるは」の結句もきびしく、十分に据わつてゐる。

あしひきの国上の山を今もかも鳴きて越ゆらむ山ほととぎす

堂堂たる声調である。万葉集に「今もかも大城の山にほととぎす鳴き響むらむ吾無けれども」があるが、これによく学んだ上に別境地を拓き得てゐる。万葉の口真似でなく、実地に「国上の山」に住み、実地に「山ほととぎす」を聞いての詠出だからである。時鳥にしる鹿にしる何にしる、百数十年前の国上山附近では良寛の歌さながらであつたのである。

さびしさに草の庵を出でてみれば稲葉おしなみ秋風ぞ吹く

「おしなみ」は押し靡けて。この歌、一首の調子には万葉集の秀歌「君待つと吾が恋ひ居ればわが屋戸の簾うごかし秋の風吹く」に似通ふところがないともいへず、上の句については誰しも後拾遺集の「寂しさに宿を立ち出て眺むればいづくもおなじ秋の夕暮」を想ひ出すであらうし、また下の句は新古今集の「旅寝して曉方の鹿の音に稲葉おしなみ秋風ぞ吹く」の下の句と全然同一なのである。それにもかかはらず、良寛の歌が後拾遺・新古今の二首よりも作品として遙かに上等であり、万葉集の一首とはまた違つた特有のしなやかな哀切さを徹らせ、みづからの独立を主張し、良寛調の個性を明瞭に伝へてゐるのは何故であらうか。後拾遺歌の下の句は抽象的・観念的で甚だたよりない。新古今歌の上の句と下の句は閑聯が曖昧で、善意を以て観てもこしらへごとに過ぎない。これらに反して良寛の歌は、「草の庵」も「稲葉」も「秋風」も眼前の現実があるがままに採つて来てゐる。同じ言葉を用ゐても精神が別である。そして順直な精神によつて駆使される時、言葉は俄然面目を改め生彩を帯びずにはおかぬ。この一事をよそにして、どこに詩歌の秘密などあらうぞ。

もつとも良寛の歌も、ここに落ちつくまでには、「わせねとる時にと君に契りしに稲葉おしなみ秋風ぞ吹く」や「何となくうらがなしきはわが門の稲葉そよがす初秋の風」などを経過してゐるのであつて、もしもこの「初秋の風」程度にとどまつたならば、かの古今集の「わが背子が衣の裾を吹き返しうらめづらしき秋の初風」あたりをも嗤ふことはできないであらう。

秋の日に光りかがやく薄の穂これの高屋にのぼりてみれば

言葉つきは殆ど口語に近い程やさしく、内容に人の耳を欽てるやうなものであるわけでもない。それでゐて常に新鮮であり、いくたび誦しても飽くところがない。これを詩歌の真の高さ深さといふ。

良寛は薄尾花をわけわけこの家に辿りついたのであらう。たまたま二階などに招ぜられて、いまし方よぎつて来た穂薄原の限りない輝きを見渡したのであらう。そしてこの白銀光は、今日われわれのうつつにも「光りかがやく」ことをやめてゐない。

月よみの光を待ちて帰りませ山路は栗の穂の多きに

「月よみの光を待ちてかへりませ君が家路は遠からなく」と共に、五合庵をおとづれた阿部定珍に与へたもので、本集秀逸の一首。栗の穂に足を傷めぬやうにといふ心遣ひの濃やかさ、醇粋さに打たれる。

「山路は栗の」も「君が家路は」も、万葉集の「月読の光に來ませあしひきの山を隔てて（山來隔りて）遠からなくに」の恩恵を蒙つてゐることは世に名高いが、良寛においては格別模倣しようとして模倣してゐるのではない。国上山西坂の徑に栗の穂のあまた落ちてゐるといふ實際、定珍の家はすぐ山麓の渡部にあるといふ實際と、友をなつかしみいたはり、月の出を待つことに託して一刻もながくひきとどめたいといふ真情が先きであり、これを即座に表現するに當つて、良寛内部に骨肉化されてゐた万葉集の詞句が口

を衝いて出て来たといふものである。

また良寛の二首が良寛調を漂はせてゐる素因として、万葉歌が二句切れであるのに対して三句切れである点も考慮に入れねばなるまい。

水や汲まむ薪や伐らむ菜や摘まむ朝の時雨の降らぬその間に

良寛を徒らに山沢に逃避する儉閑の隠士とのみ解すべきではなからう。その柴門孤住の寒酸な実生活はほぼこの吟詠の如くである。「や……む」を三たび反復した調子に、おのづから事の多端にせきたてられた気持が出てゐる。下の句はこれを受けとめ、手堅く引緊めてゐる。

いにしへを思へば夢かうつつかも夜はしぐれの雨を聞きつつ

初句、一本に「そのかみを」。一首は往時の追憶である。「好ンデ黄鵠ノ衫ヲ着、能ク白鼻ノ騮ニ騎ル。朝ニ新豊ノ酒ヲ買ヒ、暮ニ杜陵ノ花ヲ看ル。」（良寛詩句）の橋屋名主見習役としての少年時代、「一タビ家ヲ出デテヨリ、幾箇ノ春ナルカラ知ラズ。一衲ト一鉢ト、騰騰此ノ身ヲ送ル。昨日ハ山林ニ住ミ、今日ハ城闕ニ遊ブ。」（同）の備中円通寺及び諸国行脚の青年時代等を想ひ回せば、まことに「汎トシテ水上ノ蘋（浮草）ノ如シ」（同）の長嘆息を禁じ得なかつたであらう。「夢かうつつか」はやや平俗であるが、「夜はしぐれの」に打開の力があり、「雨を聞きつつ」に環境と情懷のもの静けさが出てゐる。

なにとなく心さやぎていねられずあしたは春のはじめとおもへば

詞書に「あすは春といふ夜」とある。「春」は立春の日。雪に埋もれた越路にも春はめぐつて来る。捨身僧伽の身にも春はおとづれて来る。それを童子のやうによるこび、衞はず臆せずあるがままに吐露してゐる。越後の冬の永さ陰鬱さを土台にしてみる時、この歌は一層の妙趣を覚えさせる。

「はじめとおもへば」の結句は新勅撰集の歌にもあるが、問題ではない。一首、良寛独自の風格である。山かげの岩間をつたふ苔水のかすかにわれはすみわたるかも

初句は一本に「あしひきの」。第三句は、苔水のやうにで、ここまでが「かすかに」の序。但し文飾のためだけの序ではなく、実景によつて成つたいはゆる実ある序。結句は「住みわたる」であると共に、「心水何ぞ澄澄タル」（良寛詩句）の「澄みわたる」をも兼ねた気味合ひがある。理窟でなく、直覺的にさう感じられる。

一首、良寛の代表作としての面貌十分である。重重しく張つてゐて、且つ渋滞がない。詠出の基因としては、西行の「山陰の岩根の清水たちよれば心のうちを人や汲むらむ」や伝西行の「とくとくと落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな」などを挙げてもいいが、表現されたものは万葉調であり、そして万葉調中の良寛調として完璧に渾熟してゐる。

この形に決着するまでには、第一に雑体歌の「あしひきの国上の山の冬ごもり岩根もり来る苔水のかすかに世をすみ渡るなり」があり、第二には短歌の「山かげの岩根もり来る苔水のあるかなきに世をわたるかも」があり、鍊磨の苦修察するに足りるのである。

里べには笛や太鼓の音すなり深山はさはに松の音しつ

結句一本に「松の音して」とあるが、「しつ」の方が歯切れがよく、優つてゐる。「さはに」は、しきりに、さかんに。秋艸道人が『渾斎隨筆』の中に、唐の沈佺期の詩句「城中日夕歌鐘起り、山下惟松柏ノ声ヲ聞ク。」を引いてこの歌と対比させてゐるのは極めて興味深いが、わたしは嘗て五合庵址を尋ねた折に恰も山麓から角兵衛獅子の笛か何かの響くのを聞いた経験があるせゐるか、やはり実景実情と解してゐる。